

アンドレ・モーロワ著「人生をよりよく生きる技術」講談社学術文庫、講談社 1990 年 8 月 10 日刊を読む

「読む技術とは」

1. (1) 読書も労働のひとつであろうか？ヴァレリイ・ラルボーは読書を「罰せられざる悪癖」と呼び、デカルトは反対に「過ぎし時代のもっとも教養ある人士との会話である」とした。
(2) 両者ともに正しい。
2. (1) 読書が悪癖であるのは、本が一種の阿片^{あへん}になってしまい、それでもって現実世界をはなれ、ある空想の世界に入りこむといった人たちの場合である。
(2) こういった人たちは、かたときも読まずにはいられない。
(3) 読むものは何でもいいのであって、たまたま百科事典をあけたページが水彩画の描き方を述べていたら、それをむさぼるように読むが、かわりにそれが銃火器に関する文章だったとしても同じことである。
(4) へやの中にひとりで放っておかれると、まっすぐに新聞雑誌がおいてあるテーブルのところに行って、何か一つ記事を読めばやっと心が落ちつく。
(5) 彼らは、ちょっとでも自分でものを考えるということはしないのである。
(6) 本を読んでも、そこに思想を求めるのでも事実を探すのでもなく、現実世界や自分の魂から目をさえざるべき文字の行列があればいいのだ。読んだあとで実のあるものが残ることも少ない。
(7) 情報源のあいだに価値の優劣をつけることもしない。
(8) 彼らの読書はまったくの受け身である。彼らは本に読まれるのであって、本を読み、それを解釈するのではない。
(9) 読んだ本を自分の精神の中に取り入れ、自分ものにしようというのではない。
3. (1) 楽しみとして読書は、これよりもはるかに能動的である。
(2) 小説の好きな人が、美しい文章や、自分自身の感情の目覚めと高揚^{こうよう}を求めて、あるいは自分の人生には不可能な冒険を求めて本を読むのが、楽しむための読書である。
(3) 自分の目で観察したことや、自分の感覚で感じたことが、思想家や詩人によってより完全な表現をあたえられているのを知ることがうれしいといった読者も、この中に入る。歴史の特定の時代を研究するのではなく、いろんな時代を眺めまわして、人間の苦悩はいつの世も同じであるのがおもしろいといった読者も、楽しむために本を読む人である。
(4) これは健全な読書だ。

4. (1) さいごに、読書が仕事となるのは、頭の中に大まかな柱組だけはあるものを、さらに支えたりあるいはもっと完成させたりするために必要な材料を、ある特定の知識に求めて本を読む場合である。
- (2) この仕事としての読書は、おどろくべき記憶力を持っている人の場合は別として、ふつうはペンか鉛筆を片手に持ってなされるものである。
- (3) 問題につきあたるたびごとに初めから本を読みなおさなくてはならぬのでは、読んでも何にもならない。
- (4) 私自身を例に引くことをおゆるしいただけるなら、私は歴史の本とか何かかたい本を読むときは、いつも最初か最後のページに、その本であつかわれている主題を数語で記し、それぞれの下に参照すべき箇所をページを書いておく。
- (5) そうすると、必要が生じた場合本全体を読みかえさなくてもすむ。

5. あらゆる労働と同様、読書にも守るべき規則がある。

- (1) 第一は、たくさんの作家を表面的にだけ知っているというよりも、何人かの作家といくつかの主題について完全な知識を持つ方が良いということである。
- (2) 作品の美しさというものは、最初読んだだけではなかなかわからない。
- (3) 若いうち本を読みあさるのは、ちょうど広い世間に出て行くのと同じで、友を得るためである。しかしいったん、これこそ友とすべきだという人が見つかったら、その人とともに世間づきあいをはなれるべきである。
- (4) モンテーニュ、サン・シモン、LESS、バルザック、プルーストと親しくするというだけで、人生は充分豊かになりうる。

6. 第二は、読書の多くを、名作にあてることである。

- (1) もちろん、現代作家に興味を持つことは必要で、また自然なことだ。現代作家の中には、同じ不安と同じ欲求をいただく友が見つかりやすい。
- (2) しかし群小作品の波にのみこまれてしまうことはつつしもう。
- (3) 傑作といわれる本の数だけでも、全部につきあうことはとうていできないほどだ。
- (4) 個人の選択にはまちがいがありうるし、世代が下す評価も誤ることがある。しかし、人類はまちがわない。
- (5) ホメロス、タキトゥス、シェイクスピア、モリエールは、確かにその名声に値する。
- (6) 時間の流れの試練を経ているものよりも、やはりこれら大作家たちの方をとることにしよう

7. 第三は、自分にあったものを^{せつしゅ}攝取することである。

- (1) それぞれの人には、それぞれにあった精神の^{かて}糧がある。
- (2) 自分にぴったりの作家を発見しよう。
- (3) それは、まわりの友だちが読む作家とはたいへんちがった作家になることだろう。
- (4) 文学も恋愛と同じことで、他人の好みにはおどろかされるものだ。
- (5) 自分に向いているものに対して、忠実であろう。何が自分に向いているかは、自分がいちば

んよく知っていることなのだ。

8. 第四の規則は、読書は可能なかぎり、立派なコンサートやおごそかな儀式にただようような、落ちついてひきしまった雰囲気の中ですることである。

- (1) 1 ページ走り読みしては、電話がかかってきたので中断し、再び読みだしても心は上の空で、ついに本を放りなげて明日までそのままというのでは、読書をしたことにはならない。
- (2) 本当に本を読む人は、ひとりになれる夕べの長い時間をそのためにとっておく。愛読する作家のために、冬の日曜の午後を空けておく。鉄道の旅は、バルザックやスタンダールの小説、あるいは『墓の彼方からの回想』を一気に再読できるといううれしい機会である。
- (3) 大好きなあの文句、あのパッセージ(プルーストでいえば西洋さんざしのくだり、あるいはプッチット・マドレーヌ、トルストイでいえばレーヴィンの婚約)に再びめぐりあえるのは、あたかも音楽の好きな人がストラヴィンスキーの『ペトルーシュカ』で、魔法使いのテーマがあらわれてくるのを待ちうけるのと同じほど、胸のときめく喜びである。

9. 最後に第五の規則は、自分自身を名作の読者にふさわしくすることである。

- (1) というのは、読書もスペインの宿星や恋愛と同じことで、こちらが出しただけのものしか向こうからはしてもらえないのだ。
- (2) 人間感情の描写も、そういった感情をみずから体験した人か、あるいは、まだ年が若く、感情生活の開花を期待と苦悩をもって待ちうける人にとってしか、おもしろいものではない。もっとも感動的なのは、去年はまだ冒険小説以外はうけつけなかった少年が、突如として『アンナ・カレーニナ』や『ドミニック』に熱中することである。
- (3) いまや彼は、愛する喜びと苦しみが何であるかを知っているのである。
- (4) 偉大な行動家はキップリングを、偉大な政治家はタキトゥスやレッシングを、それぞれよく読みこなすことができる。リヨテは、政府が不当にも彼からモロッコをうばい上げたその翌日に、シェイクスピアの『コリオレイナス』を読みはじめるが、それは感動的な情景ではあった。
- (5) まさに読書の技術とは、大部分、本の中に人生を見、本をとおしてそれをよりよく理解する技術である。

<コメント>

フランスの思想家、アンドレ・モーロワの「読書論」。大学2年生のときにフランス語の授業で「青年と人生を語ろう」という本でフランス語を学んで以来、アンドレ・モーロワを少しずつ読んでいます。何回読んでも新しい発見があります。

2025 年 7 月 25 日(金)